
色使い色彩菜

Feather

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色使い色彩菜

【Nコード】

N0469F

【作者名】

Feather

【あらすじ】

ごく普通の少女、色彩菜は最近あることで悩んでいた。それは隠された自分の能力のことだ。

一人の少女と不思議な力

序章

遙か昔、こね世界には『色使い』という人間とは別の人種がいた。彼らは魔法使いのようで魔法使いじゃない……。彼らは魔法は使えないが、代わりに色を使うことが出来る……。ようするに彼らが本気になればこの世界を真っ黒にすることだって出来る……。

しかし色使い達は争いを好まず、平和のために力を使うという人種なのだ。

しかし、一人の色使いを嫌う若者が人間達に

「色使いたちが攻めてくるぞお!!」
という嘘を流してしまった。

すると人間たちは武器を手に取り、彼らの住む里に攻撃を仕掛け、里ごと火で焼き払ってしまった。

色使い達はみんな死んだと誰もが思ったが……生き残っている色使いも少なくなかった……。

2

1章 蘇りし歴史

「おはようお母さん」

そう言つて朝食の並んだテーブルについた高校1年生の少女、色彩^{しき}菜^なは、平凡な日常を過ごしていた。

しかし彼女は最近気になっていることがあった。
例えば、

「このぬいぐるみの違う色はないのかなあ」と思ったら、さっきまでは普通の色だったぬいぐるみが明らかに違う色になっている……しかも明らかに汚い色に……

こんなことがここ最近たて続けて起きているのだ。
このことを友達に話しても

「きのせいだよおww」とお決まりのパターンで笑い話にされてしまい、色彩菜も

「そうかぁ・・・そうだよねw」

というふうに悩みを打ち上げれずに困ってる。

そこで思い切って両親に相談してみた。

すると

「今まで内緒にしててごめんなさい・・・実はお母さん、色使いの血がながれてるの・・・」

思いがけない言葉に驚いた。

「お母さんはこの力はそんなに強くないの・・・あなたもそんなに強くないでしょ???」

「強いかはわからないんだけど・・・最近私の周りの物の色が変わっちゃうんだけど・・・たいしたことないよね??」

すると両親が険しい顔になり

「あなたの力はそんなにも強いとは思わなかったわ・・・お母さんちよっとびっくりしちゃったw」

お父さんも驚いたらしく口が開いたままだ。

というよりお父さんはお母さんが色使いの末裔だとして結婚したのだろうか?。

いや、多分知らなかったのだろう、表情を見れば一目瞭然だ。だが別に気にしていないみたいだ。

私のお父さんは近所でも評判なほどに鈍感かつ優しい人なのだ。

私はそんなこと思ったことは無いが。

するとお母さんが

「さく、今日から猛特訓よd」

「猛特訓ってなんのこと!？」

「決まってるじゃないの、あなたを一人前の色使いにするためによ」

「ええ!!なんでそうなるの!？」

「それはね・・・あなたも色使いの末裔だからよ・・・」

母が急に真面目な顔になった。

「色使いの歴史をここで途絶えさせる訳にはいかないの．．．わかつてくれるわね．．．」というははの言葉に思わず

「わかった」

と答えてしまった。

今の母の言葉の重みは何だったのか．．．。

今の色使いの力なのだろうか．．．。

いや、きっとあれは母だけの言葉じゃない．．．死んで行った色使い達の意思だったのかもしれない。

今日から色使いとしての日常生活が幕をあけた。

3章 未来の色

「はあ〜」

色使いの訓練が始まってから色彩菜はため息ばかりをしていた。なにしろ訓練がハードだからだ。

毎日毎日色の名前を覚えさせられたり、何色と何色を混ぜると何色になるのか、といった訓練を毎日やっているのだ。勿論コーチは母だ。

「あなたにまず必要なのは色の知識よ！力を使いこなすのは二の次！」

という教訓が頭を過ぎる．．．寝ている時も．．．。

そんな過酷な訓練を続けること一週間、色彩菜の色の知識は並の芸術大学生以上になっただろう。基本色なら何色と何色を混ぜれば何になるということもわかる程になった。

普通の人間では一週間ではこの知識は付かないだろう。

色使いの血をひく色彩菜だからこそできたのだろう．．．。

「色彩については大分わかったようね」

「おかげさまでね．．．そんなことより早く力の使い方を見せてよ、いつしか色彩菜は自分から色使いになることを目指してた。」

「そうね．．．そろそろ教えてもいいのかもね。まず力の種類につ

いて教えるわ。

力にも種類があつて、物の色変えたり、物に色をつけたりする染色術。

あなたの周りで起きていた怪奇現象はこの力が発動していたから。二つ目は他人の心に色をつけたりする心色術。たとえば気分が沈んでいる人の心はブルー。

ブルーをレッドに塗り替えることで気分が明るく、熱血な人にできるの。ただしこの術の多用は禁止されてるの。

それに、この術を扱える人はそうそういないのよ。難易度がとてもたかい術なのよ。。

あともう一つは・・・絵に描いたもので相手を攻撃する彩撃術・・・

これは人間にたいしての使用は厳禁よ・・・例外はなく。

これを人間に使うと相手の人は多分死んでしまうわよ・・・。それほど危険なの。

歴史上この掟を犯したものはいない・・・歴史上では・・・。でも今のあなたには必要ない術ね。今は染色術だけで十分ね。」

と言うと母は部屋をでていった。

「お母さん自分の力は強くないっていつてたけど・・・本当のかな。たしかに母は何か隠しているような気がする。

そんなことを考えているうちに母が葡萄と林檎をもってきた。

「今からこの葡萄と林檎の色を入れ替える練習をするわ。」

といて葡萄と林檎をテーブルに置いた。

「まずこの葡萄の色をしっかりと目に焼き付けて。」

「わかった。」

葡萄の紫葡萄の紫、葡萄の紫・・・

「次にどうするの？」

「じゃあ葡萄の色を頭にいれて林檎を見て。」

と言われ、林檎をみると色がみるみる赤から紫に変わっていった。

「できたよ！お母さん！！」

「本当ねえ、もう少し時間が掛かると思ったんだけど。この練習をたくさんやって素早く染色術を出来るようにしないとね」

「お母さん、一つ聞いていい？」

「なあに？」

「この術を使えるようになってもどんなことをすればいいの？」

「うーん、力の使い方はあなた次第よ。」

よくよく考えてみるとこれは魔法ではない。

ただ魔法じゃできないこともあるかもしれない。

この力を自分一人のためだけではなく、人のために使おうと決めた月が綺麗な夜だった。

その頃、

「色彩菜はどこだ・・・色彩菜はどこだ！」

と呟きながら色彩菜を探しまわる邪悪な存在が一つ、この地に降り立った・・・

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0469f/>

色使い色彩菜

2011年1月11日02時55分発行